

## 平成 22 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

知的障害者・身体障害者施設成人入所者の健康・栄養状態の実態把握と  
栄養アセスメントの課題

学位の種類: 修士 (健康科学)

人間健康科学研究科 博士前期課程

人間健康科学専攻ヘルスプロモーションサイエンス学域

学修番号: 08899603

氏 名: 片山 夕香

(指導教員名: 稲山 貴代)

注: 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1 枚 (A 4 版) に収めること

身体計測値は、すべてのライフステージにわたって、その時点での健康状態、健康な発育・発達、加齢 (老化) に伴う推移を総合的に評価する重要な指標のひとつである。知的障害者、身体障害者においては大規模横断研究、さらにはコホート研究もないため、各年齢階級での身長や体重の分布、低体重や過体重のカットオフ値、またそれらに該当する者の割合も不明で、指標としての評価基準が確立されていない。

平成 21 (2009) 年より、障害者施設における栄養マネジメント加算がスタートし、栄養ケア・マネジメントの実施がより推進されてきた。現場においてはやむを得ず健常者や高齢者の基準値やエビデンスを適用し、裁量は現場の管理栄養士に任されているためその判断が適切かどうかを評価することは難しい。そこで、本研究では、わが国の施設入所成人知的障害者・身体障害者を対象に、一部コホートである身体計測値から 30~60 歳の年齢階級ごとの身体計測基準データを示すこと、さらにその結果をもとに、障害者の栄養アセスメントの課題を明らかにすることを目的とした。

調査 1 では、知的障害者施設成人入所者を対象とした。全国の知的障害者入所全施設 (1,950 施設) に対し、年齢階級 (30 歳代から 50 歳代)、性、原疾患、日常生活自立度、身長、調査時点の体重、1 年前の体重、5 年前の体重のカルテ調査を依頼した。最終的に 188 施設から 5,371 名分の回答が得られ、調査内容に欠損のない 4,903 名 (男性 2,643 名、女性 2,260 名) を解析対象とした。日常生活自立度は、88%が「自立」から「A1」の概ね一人で活動できる者であった。男性では、過体重 ( $BMI \geq 25 \text{ kg/m}^2$ ) 16%、低体重 (同  $< 18.5$ ) 13%、女性では過体重 27%、低体重 12%であった。5 年前の体重を用いた後ろ向きデータから、中年期において男女いずれも体重が 5 年間で 3%前後減少する傾向がみられた。

調査 2 では、身体障害者施設成人入所者を対象とした。全国の身体障害者入所全施設 (470 施設) に対し、調査 1 と同様のカルテ調査を依頼した。最終的に 49 施設から 1,217 名分の回答が得られ、調査内容に欠損のない 1,059 名 (男性 597 名、女性 462 名) を解析対象とした。日常生活自立度は、男性、女性ともに生活自立は 10%に満たず、準寝たきりが約 30%、寝たきりが 60%以上を占めた。男性では過体重 12%、低体重 35%、女性では過体重 18%、低体重 32%であった。5 年前の体重を用いた後ろ向きデータから、男女いずれも体重が減少する傾向がみられ、その減少率は男性 3%、女性 5%であった。この体重減少に年齢階級による違いは見られなかった。

調査 1, 2 より、①知的障害者、身体障害者ともに 5 年前の体重を用いた後ろ向きデータから、中年期において男女いずれも体重が 5 年間で減少する傾向がみられ、健常者中年期の年齢変化による体重推移とは対照的であること、②知的障害者、身体障害者ともに、低体重の割合が多いことが明らかになり、知的障害者・身体障害者に対する栄養支援の重要性が示唆された。今後、障害者における将来の疾病の発症・有病率、寿命などの予測因子として身体計測値からみた健康・栄養状態がどのように寄与するのか、さらなる研究が必要であると考えられる。